

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『ヒロシマ・モナムール』 : トポスとしてのヒロシマ <シンポジウム要旨>
Author(s)	平手, 友彦
Citation	フランス文学 , 31 : 57 - 58
Issue Date	2017-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00043111
Right	
Relation	



<シンポジウム要旨>

『ヒロシマ・モナムール』—トポスとしてのヒロシマ

平手 友彦

2016年11月26日(土)に日本フランス語フランス文学会中国・四国支部大会が広島大学東千田キャンパス未来創生センターで開催され、特別企画として15時15分よりシンポジウム『ヒロシマ・モナムール』—トポスとしてのヒロシマ』が一般公開で行われた。

広島で30年教鞭を取るクロード・レヴィ アルヴァレス(広島大学)の「見る」と「見える」の違いに触れた「はじめに」で口火を切ったシンポジウムは、平手友彦(広島大学)の司会で、デュラス研究の関末玲(愛知大学)「ヒロシマ—ヌヴェール、2つの都市をつなぐ試みとしての日仏映画」、広島でこの映画の調査を行った平手友彦「ヒロシマ 忘却 トラベリング 時間 アムール」、そして映画評論家でもある大久保清朗(山形大学)「原爆とメロドラマ—日本映画における原爆表象」の三つの発表が行われた。これまでのデュラスのシナリオとレネの映画という直線的な関係の研究から抜け出してトポスとしての「ヒロシマ」に注目し、「日仏合作」の問題、ロケ地広島でのトラベリング、映画の中の原爆表象とメロドラマから『ヒロシマ・モナムール』を実証的に読み解いた。発表要旨は以下の通りである。

Fai tout vu. Tout.
**HIROSHIMA
MON
AMOUR**

君はヒロシマで何も見なかった。何も。二、二十四時間の情事

シンポジウム
『ヒロシマ・モナムール』
—トポスとしてのヒロシマ

『二十時間の情事』のヒロシマ、広島で何を見たのか、見なかったのか、フランス、トラベリング、原爆映画の『ヒロシマ・モナムール』をめぐって。

日時 2016年11月26日(土) 15時15分
場所 広島大学東千田キャンパス
未来創生センター M204教室
〒730-0025 広島県広島市東区中野1-1-10
TEL.082(2)642-4968

『ヒロシマ』: クロード・レヴィ アルヴァレス(広島大学)
『ヒロシマ—ヌヴェール、2つの都市をつなぐ試みとしての日仏映画』: 関末玲(愛知大学)
『ヒロシマ 忘却 トラベリング 時間 アムール』: 平手友彦(広島大学)
『原爆とメロドラマ—日本映画における原爆表象』: 大久保清朗(山形大学)
司会: 平手友彦

主催: 日本フランス語フランス文学会中国・四国支部
実行: 関末玲、平手友彦
協賛: 広島大学未来創生センター、平手友彦研究室
082-642-4968 | info@hiroshimamonamour.jp

関末玲「ヒロシマ—ヌヴェール、2つの都市をつなぐ試みとしての日仏映画」
デュラスが脚本を手掛けた『ヒロシマ・モナムール』は、パテ・オーヴァーシーズ社と大映の共同製作である。当時大映社長であった永田雅一の舌禍事件によって、図らずも日仏合作として制作された。その経緯を辿り、興行的に成功しなかった日本公開当時の映画批評を検証して、広島とヌヴェールの等価的描写にその一因があることを明らかにした。広島という大事に対して、リヴァの抱えるヌヴェールの個人史との相違をレネが充分自覚していたことはインタビューからも明白だが、広島を主題する映画制作の困難な着地点は、2つの都市をつなぐ試みのなかにあった。

平手友彦「ヒロシマ 忘却 トラベリング 時間 アムール」

広島は『二十四時間の情事』の中でどのように描かれているか。キャバレー「カサブランカ」への疑問から始まった調査は、当時の住宅地図を手がかりにして広島市内のロケ地を特定した。復興した広島の街を官能的に飛ぶトラベリングとリヴァが彷徨うトラベリングは、過去のヌヴェールの映像と絡み合いながら記憶と忘却に揺れる。それはヒロシマの記憶と忘却として読むこともできるだろう。二人が互いに「ヒロシマ」、「ヌヴェール」と街の名で最後に相手を名指すが、それは忘却の時間に抗うためであった。

大久保清朗「原爆とメロドラマー日本映画における原爆表象」

メロドラマにはどこか否定的なニュアンスがつきまとう。それは、この言葉が「陳腐」あるいは「クリシェ」といった形容と結びつきやすいからである。だがメロドラマは、敢えて「クリシェ」であることをあからさまに顕示することで、映画と現実との関係を問い直す。原爆は、映画において二重の意味で表象不可能であった。まずGHQ占領下における外的要因によって、またそれを直接語りうる当事者たちが死者となっているという内的要因によって。『原爆の子』、『ひろしま』、『忘れえぬ慕情』、そして、「アナ、3分」などを通して、映画における原爆表象と戦後合作映画の問題を考察した。

発表後には一般参加者との質疑応答も活発に行われ、会場となった80名定員のM204講義室はほぼ満席の盛況となった。『二十四時間の情事』Hiroshima mon amourの人氣が広島で今なお根強いことを伺わせた。

なお、このシンポジウムの三つの発表はいずれも本号に論文として掲載されている。

最後に、シンポジウムの開催から本稿執筆の間にエマニュエル・リヴァの訃報が入った。2017年1月27日午後バリーで亡くなった。89歳。Le Monde 電子版は、『ヒロシマ・モナムール』のあまりに強烈な役は彼女の女優人生に「影」ombreのように付きまどつたと報じた (J. Mandelbaum, "L'actrice Emmanuelle Riva est morte", Le Monde, le 28 janvier 2017)。エマニュエル・リヴァは大文字の「愛」Amourの女優としてその記憶が今も広島に刻まれている。謹んでご冥福をお祈りする。